

光太郎と 吉田幾世



高村光太郎



吉田幾世

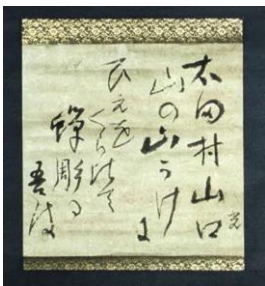
はじめまして、
婦人之友社の依
頼できました盛
岡生活学校の吉
田です

こんな大雪の日
に訪ねてくるの
は、狐か狸か、吉
田さんだけです

生徒と山荘訪問

戦後、花巻郊外旧太田村の山小屋(高村山荘)に光太郎が移住すると、吉田は羽仁夫妻の依頼で『婦人之友』に光太郎の寄稿を仰ぐべく、山荘を訪れます。光太郎の真摯な人柄と清貧生活に感銘を受けた吉田は、以後、食料品などを携えて足繁く山荘を訪問。光太郎をして「こんな大雪の日を訪ねてくるのは、狐か狸か吉田さんだけです」と言わしめました。「盛岡友の会生活学校」は、昭和23年(1948)に各種学校の認可を受け、盛岡市仙北町に校舎を建設、翌昭和24年(1949)には校名を「盛岡生活学校」と改め、初代校長に吉田が就任しました。

吉田は光太郎の山小屋に生活学校の生徒たちを引率して訪れることもし、光太郎は生徒たちの持参したたくさんのお土産をことのほか喜び、歓迎しました。逆に光太郎が生活学校を訪問し、生徒たちの作品展を見たり、卒業式で記念講演を行ったりもしました。その中で、光太郎は生活学校を「アメリカ開拓時代のフロンティア精神がある」と評したといいます。また、吉田はこうした同校と光太郎の交流について、『婦人之友』にたびたびレポートを寄稿しました。



光太郎揮毫の書額(盛岡スコール高等学校所蔵)

本展では、こうした光太郎と吉田、そして雑誌『婦人之友』や羽仁夫妻、盛岡生活学校と光太郎の関わりについて紹介いたします。戦後の岩手に花開いた進取の精神の一つの形をぜひご覧下さい。

吉田幾世と婦人之友社

吉田幾世(1912~2003)は、盛岡出身の教育者。戦前に羽仁吉一(1880~1955)・もと子(1873~1957)夫妻が東京東久留米に創設した進取の精神に富む自由学園に学びました。

卒業後、昭和7年(1932)に郷里に帰ってから、羽仁夫妻の創刊で、明治末から高村光太郎(1883~1956)が数多くの寄稿をし、光太郎の妻・智恵子(1886~1938)も寄稿したり取材を受けたりした雑誌『婦人之友』の友の会盛岡支部の仕事なども行いました。その流れの中で、吉田は友の会のメンバーと共に、昭和8年(1933)、「盛岡友の会生活学校」(現・盛岡スコール高等学校)を開校させ、自由学園の精神を受け継ぐ岩手女子教育の新生面を担うこととなりました。



盛岡生活学校の農産加工の様子

若者を励ます光太郎

光太郎の生活学校への支援は、単なる相互訪問にとどまりませんでした。同校で現在も行われているぶどうジュース作りやホームスパン制作は、光太郎の進言により始められたそうです。特にホームスパン制作にあたっては、光太郎と交流のあった花巻土沢在住のホームスパン作家・及川全三を講師として紹介するなどしています。及川は光太郎が歿した後も、足かけ十数年にわたり講師を務め、同校のホームスパン制作の礎を築きました。



卒業式に出席した光太郎(中央)